

« BALZAC ET LES ARTS EN REGARD » (Colloque international organisé par le Groupe d'Études Balzaciennes, à l'occasion de du cinquantenaire de *L'Année balzacienne*, 21-23 octobre 2010, à la Maison de Balzac, à l'Université Paris-Est Créteil, à l'Université Sorbonne – Paris IV et au Musée Balzac de Saché)

フランスで個別の作家を対象とする最も伝統ある文学会の一つが、バルザック研究会 (Groupe d'Études Balzaciennes) である。その機関誌『バルザック年報』(*L'Année balzacienne*) 誌は、世界のバルザック研究者にとって欠かすことのできない研究のための道標であり続けてきた。これの創刊 50 周年を記念して、バルザック研究会は国際シンポジウム《バルザックと諸芸術の対比》を 2010 年 10 月 21 日から 23 日まで開催した。

バルザックと芸術との関係については、ピエール・ローブリエの記念碑的著作 (*L'Intelligence de l'art chez Balzac*, 1961) をはじめとして、数多くの研究や図録が刊行されてきた。今回のシンポジウムは、先行研究をさらに発展させるとともに、新しい展望を開くことを目標に開催された。それゆえ問題となるのは、単にバルザックの作品あるいはバルザック自身と、絵画、彫刻あるいは音楽など、ある特定の芸術との間に見られる関係を探ることばかりではない。バルザックの作品の中で、ある芸術が他の芸術によって知覚、認識、表現され、その芸術が他の芸術との関連において思考の対象となるありようを分析することが重要となる。またその芸術が文学全般、バルザックの文学あるいは美学に関する言説をいかに形成し得たのかということにも注目しなくてはならない。このような問題意識のもとに、テーマ別の分科会が次の協力機関において実行された。

10 月 21 日 (金) バルザック記念館「諸芸術の知識」「鏡面に映る諸芸術」「諸芸術のプリズム」

10 月 22 日 (土) 午前クレテイユ・パリ東大学「小説における諸芸術の記載と描写」：午後
ソルボンヌ・パリ第 4 大学「見つめること、見ること?」「集中攻撃—美学と反美学」

10 月 23 日 (日) サシェ・バルザック博物館「脚色されるバルザック、受け入れられるバルザック?」「脚色から解釈へ」

開会の挨拶をする予定だった、ソルボンヌ大学名誉教授で『バルザック年報』の前の発行責任者であるマドレーヌ・アンブリエール＝ファルジョー氏は、体調不良のため欠席したが、1986 年以來今日まで編集長を務めているミシェル・リシュレ氏に、感謝の言葉と記念品 (バルザックのある初版本) が、現発行責任者ナタリー・プライス氏から贈呈され、和気あいあいの中でシンポジウムが始まった。発表者や司会の中に、『バルザック年報』創刊に携わったロジェ・ピエロ氏やアンドレ・ロラン氏もおり、こうした大家に混じって新進気鋭の研究者が大胆なあるいは緻密な発表を繰りひろげた。縦横無尽な話題は小説から演劇、彫刻から音楽、絵画からダンス、版画から建築、オペラから漫画までなど多彩きわまりないが、どれもが刺激的な理解や思わぬ発見をもたらすものであり、バルザックの創造した世界がいまだに新たな知見をもたらしてくれる真の古典であることを改めて認識させてくれた。豪華な知の饗宴とも言うべき楽しい研究集会であった。

(文責・澤田肇)